



リマーク

咬合採得時に有効な咬合床のすすめ

伊藤 慎也

(一社)三重県歯科技工士会
DENT-RADE



すべての補綴装置製作の際の重要な項目のひとつに顎位の決定があるが、中でも咬合床を用いた咬合採得時に有効な咬合床の製作法について報告する。

咬合床で咬合採得する症例の多くは義歯製作が目的と思われるが、中でも部分床義歯の場合、床の大きさから総義歯ほどの吸着に頼る事も厳しく、安定した咬合採得を行う為には、クラスプ等の維持装置を設けることも少なくない。

維持装置が付いた咬合床で咬合採得を行えば何ら問題は無いが、万が一何らかのエラーで再印象と成った場合、維持装置の再使用は難しくなり、再製作の手間や費用の課題が発生する。

そこで基礎床と維持装置（支持・把持のみ）をレジジンでの一体成形で製作することを提案する。

従来どおり設計を行い、アンダーカットをブロックアウトし、分離剤（ワセリン）を塗布したのちにトレーレジン（光重合）にて床・維持装置を一体で形成し、レスト等、支持部も積極的に付与する。

尚、より把持を安定させるには維持腕部もウィングのように延長するのも効果的である。(fig.1.2.3.4)

fig.1

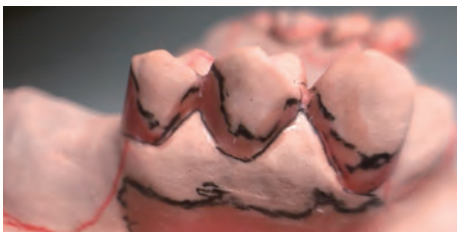


fig.1 通法通り義歯設計し、ブロックアウト後ワセリンを塗布

fig.2



fig.2 光重合タイプのトレーレジンを用いて、床・維持部を一体として圧接・成形する

口腔内での安定を求めるために考えた本装置だがシルエットが完成義歯とほぼ同等なため、口腔内装

fig.3



fig.3 支持部（レスト等）も付与する

fig.4



fig.4 ウィング状に4隅角を覆うと、より床安定に繋がる

fig.5

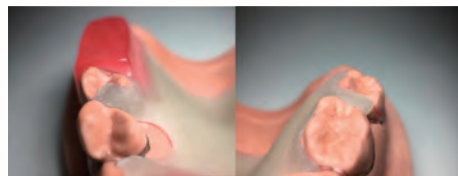


fig.5 模型上正面観 模型上では適合が得られている

fig.6

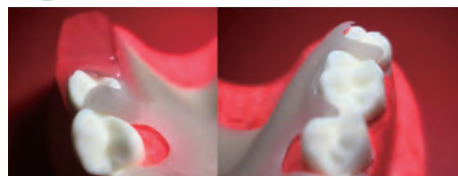


fig.6 口腔内セット時正面観（擬似的）浮き上がりが見て取れる。これにより、今回の作業用模型には変形等の不備があったといえる

着時に作業用模型の不備を確認する事ができ、義歯完成後の不適合を未然に防ぐ役割も担う。(fig.5.6)

咬合採得による顎位が製作されるすべての補綴装置の礎となることは明確であり、その為には如何に確実に口腔内の状況を咬合器上に再現できるかが重要と考えている。

本稿が日々の円滑な臨床に役立てば幸いである。